

『青い花』：レーモン・クノーが書いた 一般言語学

尾形 弘人

はじめに

レーモン・クノーの『青い花』は、過去から現在へと歴史を旅する中世封建貴族オージュの夢と、現代のパリ郊外で無為徒食な生活を送るシドロランの夢とが交錯する極めて荒唐無稽な物語である。が、「語に韻を踏ませるように、場面や人物に韻を踏ませることができる」(B.C.L., p.42)とするならば、『青い花』の二人の主人公もまた「むやみやたらに＝^{サン・リム・ニ・レゾン}韻も理由もなく」道化を演じているわけではないであろう。実際、『青い花』の表層的な過剰は、実はクノーの思想の根幹をなす「夢、言葉、歴史」(cf. F.B., p.40)を巡って多元決定されたものであり、我々は二人の対照性に、これらの問題に関わる寓意を読み取ることができる。例えば「歴史」。その序文に「『青い花』に関心を寄せてくれた読者に補足的情報を与えるであろう」(H.M., p.8)と記されている『ある歴史モデル』に、「^{イネルシー}慣性の法則」に関する次の記述がある。

集団が自ら消滅することは決してない。集団の決定的な破滅を完遂し、その消滅を確実なものとするためには、常に何らかの外的な力の介入が必要である。例えば、外国による征服、大災害。(H.M., p.87)

つまり、日常生活に埋没するシドロランは歴史を停滞させる「^{イネルシー}集団の無気力」を、活動的に、そして暴力的に時間を渡り歩くオージュは歴史を展開させる「外的な力」を、それぞれ具現しているのである。これが「〔ヘーゲル哲学の〕逆説的な、過度の、暴力的な、そしてとりわけ血なまぐさい諸契機¹⁾」を強調

するアンドレ・コジューヴを下敷きとしていることは明らかであろう。が、他のコードから出発しても一貫した読みが可能であることは、フロイトの「夢」理論をもとに、オージュを「以前^{サ・シ・ド・ツッファン}の^{その}欲動」として、シドロランを「可愛そうな小さな自我」として解釈するアンヌ・クランシエが示した通りである²⁾。ここでも二人の対立が、同一的であろうとする「内的な力」（意識の恒常性）と、それを破滅させようと介入してくる「外的な力」（無意識の欲動）との相剋として理解されていることに注目しておこう。

それでは「言葉」についてはどうかといえ、物語形式の点からクノーの「二つの言葉³⁾」が問題とされることはあっても、『青い花』の物語全体が、言語（学）のアレゴリー（パロディー）として読まれることはなかった。本論はあえてこれを試みるものであるが、それでは、我々は「言葉」にいかなる固有名詞を与えればよいのであろうか。「我々は死語を書いているのだ」と主張し、クノーの「ネオ・バベル語」（後述）に多大の影響を与えたヴァンドリーであろうか。が、『青い花』が書かれた時期には、「この〔ヴァンドリーが示唆した〕テーゼは、およそ20年ほど前に、私が好んで繰り返し支持したものであるが、いまやそれほど根拠づけられているようには思われぬ」（V.G., p.224）と述べられている以上、その影は薄いと言わざるを得ない。そこで注目したいのは、次のメタ言語的発話である。

ふむ、ふむ。（……）私は一度に三つの質問に答えることはできません。
私の談話^{ディスクール}は、あらゆる人間の談話^{ディスクール}と同様に、線条的^{リネエール}なのですから。（F. B., pp.40-41）

ソシュールの読者ならば直ちに気づくであろうが、これは『一般言語学講義』の「二つの要素を同時に発声する可能性を排除する言語の線条的^{リネエール}特質」（C.L. G., p.170）のパロディーに他ならないであろう。『青い花』と『一般言語学講義』、確かに突飛な組み合わせかもしれない。が、『青い花』が書かれた1960年代といえ、ソシュールに着想を得た構造主義が台頭し、盛んに『一般言

『言語学講義』の繙読を勧めていた時期ではなかつたらうか。実際、クノーが言語学的知見の習得に努めていたことは事実であり、その中には、少なくとも、トルベツコイ、バンヴェニスト、マルチネなど、いわゆる「構造言語学者」も含まれていることを考慮するならば⁴⁾、クノーがソシユール理論に接する機会を得たであろうことは想像に難くない。そこで本論では、まずはこの『一般言語学講義』をソシユールのな、さらには、ポスト・ソシユールのな言説に通ずる「テキストの出口」として措定し、『青い花』の荒唐無稽な物語に一つの可能な読みを与えるとともに、「文学を公然と言語の問題提起につれ戻した⁵⁾」とされるクノーの先駆性を、今日の「言語の問題提起」から逆に照射してみたい。我々は最終的に、クノーが書いた「一般言語学」のうちに、実にスキャンダラスな「書く行為^{エックリチュール}=書き言葉」を見るであろう。

I. オージュの通時態／シドロランの共時態

先に確認したとおり、「歴史」であれ「夢」であれ、『青い花』の基本構造は「内的な力」と「外的な力」との相剋に求められるが、「言葉」（より正確には「言語^{ラング}」）のうちにソシユールが見出したものも、対立的かつ相互補完的な二つの力の戯れであった。

あらゆる社会制度のうちで、言語ほど独断専行に左右されることの少ないものはない。それは社会大衆の生活と一体をなす。そして大衆は本来無気力なものであるから、何よりもまず保守の要因として現れる。(C.L.G., pp.107-108)

(……)言語を当事者たちが思いのままに変更しうる単純な取り決めと見なすことを妨げるものは、それ〔=個人間の実践関係において理性をたわめるもの〕ではない。社会力の作用と結びつくものは、時間の作用である；持続の外にでる時は、言語的現実^{レアル}は完全ではなく、いかなる結論も下すことができない。(C.L.G., p.113)

補足するならば、言語体系の不易性は共時態の内部で作用している「あらゆる言語的改新に対する集团的無気力の抵抗」(C.L.G., p.107)に起因し、それにも関わらず通時的变化を被るのは、共時的意識の埒外で体系を差異化する「時間の作用」が働いているからだ、というのである。ここで注目したいのはクノーの「慣性の法則」との語彙的・構造的相同性である。というのも、『青い花』は「外的な力」たるオージュに、まさに「通時的規則に従って」ネオロジズムを作り出す特権を与えているのである。

貴様自身、新語創造するでない。それはまさに公爵の特権なのじゃから。そうして、わしはスペイン語の pinaça から pinasse を引き出し、péniche としたのじゃ。ラテン語の sexta hora からは、スペイン語の siesta, そして sieste。そしてな、mouchenez は下卑ていると思うて、代わりに低ラテン語の mucare から、もっともよく受け入れられ、もっとも通時的な規則に従って、真に仏蘭西語的な語を派生させてやったのじゃ。(F. B., p.42)

これはまさに「同一の集団意識によっては知覚されず、かつ互いの間に体系を形づくることなく次々と置きかわる継起的事項を結ぶ関係」(C.L.G., p.140)に他ならないであろう。つまり、オージュの歴史の旅は同時に言語の通時的变化を辿る旅でもあり、「ネオロジズムの特権」を専横し、言語の変化を一身に担う彼は、差異化の力としての「時間の作用」に他ならないのである。

他方、もう一人の主人公であるシドロランは、「ネオロジズムの特権」を持たず、逆にアルカイズムが彼の存在様態を特徴づけている。

それ〔=「^{ボキヨン}樵」〕もまた昔の言葉だったのですか。お客さん〔=シドロラン〕、どうしてこんな風に廃用される言葉があるのでしょうか？ いまこうしてあなたと話している私だって、これまで生きてきた間に、言葉がいくつも目の前から消えていくのを見ました。映像映画とか、

タクシメートルとか、^{シェフ・ドイロ}町内防空班長とか、エトセトラ。(F.B., p.127)

つまり、言語の共時態が「同一の集団意識によって知覚されるまま」(C.L.G., p.140)の体系であるとするならば、共時的意識は、定義上、通時的な差異化の力を知覚し得ないのであり、それ故、言語の変化に関しては「事後的」に確認するしかないのである。実際、「^{シーニュ・ディスタンクティブ}弁別特性に欠けた人物」(F.B., p.97)として描かれ、「何もしないことに何かを見つける」(F.B., p.62)と紹介されるシドロランは、まさに「あらゆる言語的改新に対する集団的無気力の抵抗」の擬人化に他ならないであろう。

ここで『青い花』の構造について言うならば、オージュが旅する175年ごとと区切られた5つの時代(1264, 1439, 1614, 1789, 1964)は、5つの言語的・文化的な共時態の層として理解されよう。オージュはその「ネオロジスムの特権」によって一つ一つ共時態を解体しながらシドロランの住む現在へと近づいてくるのであるが、二人の出会いは後述することにして、まずはオージュの最初の旅を例にして、クノーが書いた「一般言語学」の基本構造を確認しておこう。

1264年、オージュは建設中のノートル・ダムを視察するため、田舎の城から首都パリへ、ということは、外部から内部へ、周辺から中心へと旅立つ。パリには聖王ルイが共時体系の中心として君臨しており、彼はそのようなものとして、時代の使命たる十字軍参戦をオージュに求める。が、共時態をつき動かす「外的な力」であるオージュがこのコード化された言説に従うはずもなく、彼はあくまでもこれを拒絶する。ここで注目すべきは、オージュの振る舞いに対する「^{フロット}民衆」の反応である。つまり、この厄介な他者に「大量の腐った卵と萎びたトマト」(F.B., p.26)を食らわせる彼らは、まさしく先の「あらゆる言語的改新に対する集団的無気力の抵抗」として振る舞っているのである。とするならば、オージュによる民衆の惨殺は、1264年の共時体系の解体・消失を意味しよう。というより、言語においては「革命は生じ得ない」(C.L.G., p.107)のであるから、体系の組み換えが起こったといった方が適切

であろう。それ故、オージュの行為の肯定的な面も強調しておかねばならない。つまり、彼の武器である「短剣 braquemart」は、クノーが得意とする俗語で「ペニス」を意味し、彼はここで新しい言語の種^{スベルム}を蒔いていると解釈し得るのである。これによって体系は活性化され、再び安定を得るとともに、オージュは舞台を去る。我々は時を経て175年後に、捕らわれ友ジル・ド・レ、あの人喰い元帥を救うために「首都パリ」へ向かうオージュと再会するであろう。

II. 通時的力としての「バベルの塔」

以上に素描したように、オージュの「ネオロジスムの特権」は、体系の同一性を差異化する通時的な力の行使であった。とするならば、司祭オネジフォールが「あなたの意味論は異端の臭いがする」(F.B., p.42)と評するのも理由のないことではない。というのも、根本的に「純正語法主義」^{ピュールリスト}的な教会にとって、神の「太初の言」^{はじめ パロール}による創世神話こそが「正当な」意味論なのであるから。オネジフォールは「動物達がバベルの塔の建設に参加しなかったことは明らかであり、彼らが互いに理解しあうことを妨げるものは何もない」(F.B., p.40)と述べているが、これを「一般言語学」の用語で言うならば、「バベルの塔」以来、絶対にして唯一の根拠たる神のロゴスが失われ、言語は恣意的かつ差異的な体系となり通時的変化を被るようになった、ということになろう。そこで注目したいのは、通時的存在たるオージュの物語の冒頭である。

十二百六十四年九月二十五日、薄明、オージュ公は城の主塔の頂上にやって来て、ほんの少し、歴史状況を注視した。(……)地平線には疲れた^{ロマン・}ファティグ^{トラヴァーユ・デュ・ロマン}ローマ人達〔「ローマ人の仕事」といえば「^{トラヴァーユ・ファティガン}疲れる仕事」の意〕や、サラザン・ド・コラント^{レザン・ド・コラント}コリントのサラセン人〔コリント名産の乾しブドウ〕や、古代フランク族^{フラン・アンシャン}〔旧フラン紙幣〕や、孤独なアラン人^{アラン・スール}〔^{ランスール}経帷子〕の弱々しいシルエットが描かれていた。(……)フン族は^{タルタル}韃靼人ステーキの支度をし、^{ゴロワー(ズ)}ガリア人は

ジプシー^{ジプシー}女を燻らせていた。ローマ人達は稲妻^{グレッツク}模様〔ギリシャ^{グレッツク}女〕を描き、蕎麦^{サラザン}の民はカラス麦を刈っていた。フランク族は土地^{ソル}を探し〔旧フランクは昔の貨幣^{ソル}を探し〕、アラン人達は五人のオセッ^{サンク・オセッ}人〔レセプ^{サンク・ア・セッ}ション〕を眺めていた。(F.B., p.13)

これに続けオージュは、「いくつかの言葉^{カランプール}遊び、いくつかの時代^{アナクロニスム}錯誤のために、あまりにも歴史が多すぎる」(F.B., pp.13-14)と嘆じているが、実際、この遊戯言語の横溢を前にしては、「ちんぷんかんぷんだ」と口にしない者はいないであろう。すなわち、「それはバベルの塔だ C'est la tour de Babel」と。とするならば、このような言葉の混乱の直中に聳え立つオージュの「主塔^{ドンジョン}」は、まさしく、いにしえの「バベルの塔」を髣髴とさせはしないだろうか。つまり、そこから散乱するシニフィアンの破片を見下ろすオージュは、「バベルの塔」的な災厄をもたらす「言葉を乱す神⁶⁾」に他ならないのである。

他方、シドロランの物語の冒頭にも、奇妙な「ちんぷんかんぷん語^{サンビール}」を話すキャンパー達が登場する。原文のまま引用しよう。

Esquiouze euss, dit le campeur mâle, mà wie sind lost. (……) Capito? Egarrirtes... lostes. (……) Campigne? Lontano? Euss... smarriti... (……) Vous ferchtéer l'iouropéen? (F.B., pp.18-19)

つまりは、キャンプ場の所在を尋ねているに過ぎないのだが、彼らは様々な言語からなる「混成言語^{サビニール}」をもって道を尋ねるのである。シドロランは「よく喋る奴だが、こいつは土着語を話しているのでしょうか、それとも新ちんぷんかんぷん語^{ネオ・バベリアン}であろうか？」(F.B., p.19)と訝っているが、ここで「ネオ・バベル語」を操るキャンパー達は、我々の考えでは、ソシユールの言う「インターコースの力」(C.L.G., pp.281-285)、すなわち、地域と地域との間を往来し、言語体系の閉鎖性を外に開く役割を担っている。つまり、オージュが時代と時代との間に橋を架けるとしたならば、ネオ・バベリアン達は空間

と空間とを繋ぐことによって、共時態を差異化、活性化するのである。が、「彼らは二度と私の記憶の迷宮に迷い込んで来ることはないだろう」(F.B., p. 23)と結論づけるシドロランは、まさに「インターコースの力」に対する「^{エスプリ・ド・クロシェ}縄張り根性」(C.L.G., pp.281-285)となつてはいないだろうか。つまり、シドロランは、ネオ・バベリアンという他者を意識から排除することによって、彼が住まう共時態を内に閉じ、差異化の契機を隠蔽するのである。

が、通時的变化を免れる共時態はあり得ず、シドロランのそれとて例外ではない。これを象徴しているのは、通時的力たるオージュがシドロランの時代に近づいてくるに従って、徐々に完成に向かう建設中の「^{イムブル}建物」である。あたかもオージュが「バベルの塔」の主として登場し、まず「^{トラヴォー}ノートル・ダムの工事」(F.B., p.15)の視察に赴いたように、シドロランは「向かいで行われている^{トラヴォー}工事」(F.B., p.28)を見るため、しばしばこの建築現場を訪れる(もっとも、彼にはそこで起ころうとしていることが理解不能なのだが)。が、そこに行くためには、「不可欠な用心」(F.B., p.28)をもって往来の激しい車道を渡らねばならない。何故か。注目すべきは、危うくトラックに轢かれそうになった通行人との会話である。

「あなたは警告されておりましたよ。《トラック出入り口危険》と書かれてあったではないですか。私はなぜ学校で読みかたを学ぶのだらうと訝ったものでした。今や理解しました。つまりは、トラックを避けるためなのです。」

「なるほど。でも私も読み方を学んだけれど、あなたのものとは別の言語であったと仮定してみてください。その時、私は必然的に轢かれねばならないのでしょうか？」(F.B., pp.28-29)

読み方を学ぶことによってトラックを避けること、これは共時体系にいわば飼い慣らされる限りにおいて安全でいられる主体の姿を意味しよう。つまり、母国語が規定する「同一の集団意識」に埋没することなくしては、主体はや

はり「別の言語」によって「必然的に轢かれる」運命にあるのである。ここで「別の言語」は、必ずしも外国語に限られるものではない。クノーは「語る」ということ、これはいつも大きな問題である。というのも、それは常に表面的な内容を遙か遠くへ越え出してしまうからである」(Entretiens, pp.12-13)と語っているが、主体の意図とは無関係に拡散していく言葉は、それが病的なものであれ、あるいは詩的なものであれ、既にして「別の言語」であろう。バベルの民が味わったものもこれで、あれほど親密だった言語の突然のよそよそしさが、ここでは問題となっているのである。

このような危険性を孕みながらも、シドロランは相変わらず酒を飲んで平底舟で昼寝をするだけの無為な日々を送っている。が、その傍らで、この「建物」は確実に完成に向かい、ついにオージュが「キャンパー」として、ということは、「ネオ・バベリアン」として、1964年に到達する時、この現代の「バベルの塔」は劇的に崩壊してしまう。

「そんな粗末な建設じゃなかったはずよね、あの建物は。独りでに崩れるわけがないわ。違う？」

少し沈黙した後で、シドロランは答えた。

「僕は絵描きで、建築家じゃないよ。」

彼は重々しく微笑み、結論づけた。

「確かにそうだ。僕たちには何の関係もないことだ。」(F.B., p.272)

確かに建物は「独りでに」崩れたのではないし、また、シドロラン達には「何の関係もない」ことであろう。というのも、それは、「言葉を乱す神」たるオージュの力、シドロランの共時体系の「外部」で作用しつづけていた「時間の作用」の為せる業に他ならないからである。つまり、先で「二度とは戻ってはこないだろう」と意識外に排除されたものが回帰し、決定的なやり方で「ネオロジスムの特権」を行使したのである。

Ⅲ. ログサントリズムとしての「バベルの塔」

ところで、マリナ・ヤグェーロは「普遍言語の創造はほとんどの場合、バベルの塔以前の原始言語へのノスタルジーによるものである、(……)すなわち、言語の考案者を動機づけているのは真正にして唯一の言語、《アダムのものにして人間のものなる言語》の失われし樂園探究なのである⁷⁾」と述べている。この言語狂の夢は、「新しい言葉は新しい思考を生み出し、新しい思想は新鮮な言語を欲している」(B.C.L., p.63)と語るクノーの言語観にも通ずるものではなかろうか。が、彼の「新しい言葉」は「アダムの言葉」には似ても似つかぬ「ネオ・バベル語」であった。それでは、通常ならば普遍言語の創造へと向かわせる自然言語の欠陥をあえて肯定し⁸⁾、自らの言葉を「太初の言葉」の樂園から能うる限り遠ざけるクノーの「新しい思考」とは、いかなるものであろうか。

オージュは、1614年の旅で出会った錬金術師ティモレオ・ティモレイと共に、卑金属を金銀に変成させる哲学者の石の獲得を試みる。ところで、錬金術の真の目的は、「アダムの失墜によって現世で劣化し、その純潔と輝きと充実と原初の特性とを失った生命がふたたびそれらを取りもどす、その一連の過程を再現すること⁹⁾」であった。とするならば、それは「バベルの塔」の災厄の終焉、つまり、起源の言葉への回帰をも意味するであろう。言葉の錬金術師ランボーも、いわゆる「見者の手紙」の中で、普遍言語の到来を予告してはいなかっただろうか¹⁰⁾。それはおくとしても、ティモレイの十全な言語能力、すなわち、「蜜蜂の言葉を理解し、学ばずともトピナンプー語を話し、千里離れた人と言葉を交わし、天の音楽を聞き、全ての秘密文書を苦もなく読み解き、1003冊の作品の内容を暗記し、一度も研究しなくともあらゆることを関与的に論ずる」(F.B., p.138)ことができる言葉は、神のロゴスにこそ相応しいであろう。

が、結局のところ、ヘルメスの術の探究は徒労に終わる。何故か。クノーはある対談において、神の^{パロール}言に触れた折に、「私は言葉に絶対的な信頼を寄

せてはいない。ギリシア哲学＝キリスト教の理論とは逆に、私は言葉が絶対的なものであるとは考えない。言葉の中に真実が宿り、言葉の殻を取ることによって真理が見出されるとは思えないのである」(*Entretiens*, p.14)と語っている。つまり、オージュの言葉の錬金術の挫折は、「バベルの塔」的な言語を純化し、絶対的な真理を宿す言葉を獲得するという幸福な夢に対するクノーの懐疑を物語っているのである。が、それだけではない。オージュ＝クノーは、次の1789年の旅において、こともあろうにラスコーに壁画を描いて「^{プレアダミット}アダム以前の人間」を捏造し、「アダムのものにして人類のものなる言語」の非存在証明を企てるのである。

「何が見える？」

完全にうんざりしてリファントが答えた。

「子供のデッサンですな。」

「神父よ、よくぞ言った！ アダム以前の人間達は子供の純粹さをもっていたのだ。もちろん、彼らは子供のように描いていた。わしはお前に強いて言わせたわけではないぞ、神父。お前の方がわしの議論を助けてくれたのじゃ。これらのデッサンを描いた人々は、これらの絵画——見ろ、ここに顔料があるじゃろ、これらの彫刻——見ろ、あそこに岩の切り込みがある、これらの人々は原罪以前に生きていたのだ。彼らはキリストが福音書で述べているあの子供たちのようじゃないか。故に、これらのデッサンの^{オートゥール}作者は、アダム以前の人間達なのじゃ。これが彼らが存在していた証拠だ。(F.B., pp.208-209)

アダムを人類の祖として否定することは、神が彼に与えた命名権を否定することに他ならない。「アダムが生物に名づけたところは皆その名となりぬ」と創世記にはあるが、オージュはこの「^{ノ・メ・ン・プロ・プリウム}本来の意味における名」の虚構性にさらなる虚構をもって応えるのである。彼の論理は確かに荒唐無稽ではあるが、その論拠となった「子供 enfant」とは、語源的には、まさに「言葉を話

さぬもの *infans*」ではなかつたらうか。つまり、オージュの奇妙な脱構築は、図らずも、太初めに在りきはロゴスにあらず、むしろ、ロゴスの非存であった、と結論づけているのである。

さて、オージュはこの「発見」をもって、教会を中心とする世界を転覆させようと首都パリへと赴くが、時は1789年、大革命の勃発により、スペインのアルタミラへの亡命を余儀無くされる。周知のとおり、フランス革命以来、近代的な思考は「人間」という理念に全幅の信頼をおくと同時に、「《同一者》の歴史」が、非合理性、暴力性、狂気といった「《他者》の歴史」を分割・排除してきた¹¹⁾。大革命によるオージュの国外逃亡が意味するものもこれであり、^{ロゴセントリズム}理性中心主義の確立によって、オージュ的な過剰が体系の外へと排除されたのである。とするならば、ここで決定的に抑圧されたかに見えたオージュが、時を経て1964年の現代に回帰してくることは偶然ではないであろう。というのも、時代は今や「人間の死¹²⁾」を宣告し、「黙りこくったままおとなしく身動きひとつしない大地に、分裂、脆さ、亀裂といったものを回復させる¹³⁾」試みが開始されつつあるからである。ここで注目すべきは、崩壊する「建物」と運命を共にする管理人ラ・バランスの存在である。

みなさん、私が担っている名前は、私を特異な境遇に運命づけました。周知のように、天^{ラ・バランス}秤は正義の象徴ですが、生まれてこのかた、私はそれを地上に君臨させようと努めてきました。もちろん、私の微力の及ぶ範囲においてですが。もし社会がこの宿命的な名を私に与えたとするならば、他方、自然はとりわけ活動的な知能を私に備えつけました。それで若い頃から、私は公的な正義というものが虚しい言葉に過ぎないことに気づき、私個人の努力によって、正式な法廷の無能力の埋め合わせをしようとしたのです。(……) 安心してください。私が行動するのは、関わりあっている事例をよくよく考えた後のことなのですから。みなさん、それこそ私と普通の裁判官の違いなのです。つまり、私は考えるのです。(F.B., p.251)

ここに明らかなおり、ラ・バランスは徹底したデカルト主義者であり、「正義」という人間的価値を天の高みにまで到らせようとする合理主義的思考の申し子なのである。ところで、意味生成性^{シニフィアンス}を「サンボリック」と「セミオティック」の戯れとして捉えたのはクリステヴァであった¹⁴⁾。我々としては、これにならって、自らの名の象徴的価値^{サンボリック}に囚われ、「正義」によって体系の秩序を司るラ・バランスをサンボリックな抑圧力として、そして、ときおり「パリ」という中心にやって来ては混乱を引き起こすネオ・バベリアン=オージュを、サンボリックに侵入してきては体系の組み換えを行うセミオティックな欲動として解釈したい。このように考えると、「建物」の管理人となるに際して、ラ・バランスがネオ・バベリアン達をキャンプ場から「追い出して」(F.B., p.229) しまうことも意味深いものとなろう。つまり、ちょうどオージュがデカルトの「思惟」^{コギト}が用意したフランス革命によって排除されたように、カルテジアンたるラ・バランスは、彼が管理するサンボリックの安定にとっては危険極まりないセミオティックな力^{ルフル}を抑圧することによって、現代の「バベルの塔」の主人となるのである。

このコギト至上主義者と比較するならば、同じ1964年の共時態に属するシドロランは、むしろ、サンボリック体系の周辺的な存在である。この対比が明瞭に現れるのは、両者の夢に対する態度である。夢というものは「抑圧された願望の充足¹⁵⁾」であり、それ故、オージュが住まう無意識なくしては成立し得ない。とするならば、考えすぎるあまり決して夢を見ないラ・バランスに対し、「私はたくさん夢を見ます。夢を見ることは極めて興味深い」(F.B., p.197)と述べるシドロランは、まさに、ラ・バランスのサンボリックとオージュのセミオティックとの識域に位置していると言えよう¹⁶⁾。この両義性をクリステヴァは、「主体とはセミオティックにしてかつサンボリックなのである¹⁷⁾」と述べているが、我々はこのようなシドロランの在り方に、「私はこんなふうにして語らねばならないことに非常な苦痛を感じず。というのもまさに、ある少しの真実から別のもう少しの真実へと移る境界線がどこにあるのか、わたしには分からないからだ」(Entretiens, p.14)と語るクノーを重ね見

ることができよう。というのも、「〔真／偽の〕境界は、サンボリックのなかへのセミオティックの流入によって取り返しのつかない打撃を受ける¹⁸⁾」のであり、クノーが見出しかねている「境界線」こそ、サンボリックとセミオティックの弁証法ならざる弁証法が果たされる場に他ならないと考えられるからである。次に我々はシドロラン＝クノーの物語を検討しよう。

IV. 落書＝文学

妻殺しの嫌疑で未決拘留の身にあったシドロランは、晴れて放免となり再び社会生活に戻ってきたところである。が、事は済んだはずなのに、ここに一人「卑怯な匿名人物」(F.B., p.194)がいて、彼が住む平底舟の囲い壁を中傷の落書きで汚す。いったいそれは誰なのか。シドロランの物語の焦点の一つは、この推理小説的な謎解きにあるのだが、物語の最後には、犯人はシドロラン本人であることが明らかにされる。何とも奇妙な結末であるが、その意味するところは極めて問題提起的であり、スキャンダラスでさえある。

落書きだって、それが何だというんだ。せいぜい文学ってところだ。

Les graffiti, qu'est-ce que c'est? tout juste de la littérature. (F.B., p. 98)

「それは文学だ C'est de la littérature」と言えば、「それは取るに足らない」を意味する(cf. V. G., pp.64-66, 89-96)。それ故、ここで「落書き＝文学」は無価値さの度合いにおいて成立しているように見えるが、ことはそう単純ではない。というのも、クノーはこの侮蔑表現に集約される全体的文学不信について、「文学を軽蔑すると主張する者達も、文壇で名を馳せる術を用いることによく長けていたのであり、栄光——もちろん文学の栄光——への道を歩むやり方に精通していたのである」(V.G., p.66)と、その逆説をついて批判しているからである。とするならば、上の「落書き＝文学」は否定転じて肯定と化し、積極的な意味づけを許すであろう。が、いかにしてか。ここで確

認すべきは、「文学」も「落書き」も等しく「書かれたもの」に他ならないという単純な事実である。というのも、もし文学が落書きとして措定され、落書きが文学の定義となるような「書く行為」があるとするならば、それはクノーの「ネオ・バベル語」をおいて他にはないと思われるからである。実際、クノーの出発点にあったものは、文学的なものと非文学的なものと混交、すなわち、「書き言葉」と「話し言葉」の価値の転倒であった。

(……) 言葉は、私の言葉は——生成変転するフランス語は——、溶岩の如く熱く沸き立ち、いつの日にか、我々が習慣的に用いている魅力も価値もない統辞法と書記法の固い殻を、ついには破裂させることになる。文と語の可緞性を意識するならば、現在の書き言葉の^{エクリチュール}際限のない圧政の容認は不可能となる。

もっとも、私は、民衆的なもの、生成変転するもの、あるいは《世間》などを、ことさら尊重するわけでも、特別に配慮しているわけでもない。が、現代フランス語の中に、現実的に神聖なものを何ら見出さないからこそ、私は民衆の^{ランガー・ジュ・ポピュレール}言葉を書かれた^{ランガー・ジュ・エクリ}言葉の尊厳にまで高め、新しい文学、新しい詩の源泉とすることに反対する理由もまた見出さないのである。

(B.C.L., p.24)

「ネオ・バベル語」はこのような偶像破壊的な衝動から創造されたものであるが、考えてみれば、意図されたものではないとはいえ、「落書き」という民衆の^{エクリチュール}言葉もまた「現代フランス語をいまだに締めつけている^{エクリチュール}書き言葉の《取り決め》(統辞法の、語彙の、そしてさらに文体の取り決め)」(B.C.L., p.16)を^{ランガー・ジュ・パルレ・エクリ}侵犯・逸脱する「書かれた話し言葉」(B.C.L., p.12. 強調はクノー)に他ならない。それ故、上の「落書き＝文学」という等式は、クノーの^{エクリチュール}自体を自己言及的に指し示しているのであって、落書きで汚されるシドロランの「^{クロチュール・ド・ミュール}罫い壁」は、まさに、バルトの言う「文学が文学として刻印されるゆえんのもの、すなわち、自らの^{クロチュール}罫い¹⁹⁾」に他ならな

いのである。

もう少し敷衍しよう。『ある歴史モデル』に次の記述がある。

リテラチュール
文学は人間の現実的な活動を想像的な平面に投影したものであり、
トラヴァージュ
労働は人間の想像的な活動を現実的な平面に投影したものである。両者は同時に生まれる。一方は失われた楽園を隠喩的に指し示し、人間の不幸を計る。もう一方は見出された楽園に向かって前進し、人間の幸福を企てる。(H.M., p.103)

この文学と労働の関係は、『青い花』においては、シドロランの「落書き」とラ・バランスの「建物」としてテキスト化されている。

「それ〔＝落書きを塗り直すこと〕は^{トラヴァージュ}労働ではないですね。」

「その通りです」とシドロランは答える。「まったくこれは気晴らしなのです。無償の気晴らしなのですよ。」

「あなたはわずかな物で暇潰しをしているのですね。」

「全くつまらないものだって楽しめますよ。例えば、あれとかね。」

そして彼は通りの向こう側に建設されている建物を指し示す。

「あれは^{トラヴァージュ}労働ですね」と通行人が言う。

「私もそう言いたかったのです。」(F.B., p.142)

シドロランの「落書き」がクノーの「文学」であるとして、それでは、ラ・バランスによって管理されることになる「建物＝労働」は、いったい何を意味しているのであろうか。「書かれた話し言葉」の探究について、クノーはこう述べている。

正確を期しておきたいが、私は文学と詩を、軽蔑的に《^{コンシエルジュ}管理人〔のようにお喋りな人〕》の言葉と呼ばれている単なる速記録に帰着させねばなら

ないと言いたいのではない。そのようなもの〔＝《管理人》の言葉〕は、結局のところ、いくぶん不正確なアカデミー会員達の言葉にすぎない。
(*B.C.L.*, p.40)

つまり、「建物」の崩壊による^{コンシエルジュ}管理人ラ・バランスの死は、「アカデミー会員達の言葉」、すなわち、「16世紀の文法家と17世紀の詩人たちが紡いだ絹の繭」(*B.C.L.*, p.16)の中でいつしか死語と化しつつある伝統的な「書き言葉」の終焉を意味しているのである。「私は《^{パンセ}思う》という動詞を適切に使っているわけではない」(*F.B.*, p.199)と語るラ・バランスと、「かくも心地よく、極めて純粹で、魅惑的で、うっとりさせるような、透き通ったフランス語文法」を「もはや信じてはならない」(*F.B.*, p.38)と警告するシドロラン、この相異なる言語観こそ「建物」と「落書き」とを対立させるものに他ならない。

しかしながら、何故シドロランは自ら「匿名人物」^{アノニーム}であろう欲するのであろうか。ここで注目すべきは「落書き graffiti」の意味場である。これは「掻き文字(絵)」を意味するイタリア語《graffito》からの借用語であるが、特に考古学用語では、古代人が洞窟などに残したものを意味する。つまり、シドロランの「落書き」と、オージュの「ラスコーの壁画」とが、この一語に圧縮されているのである。これが一つ。それから、「引っ掻く」を意味するイタリア語《graffiare》に相当するフランス語は《griffer》であるが、こちらの方は、そこから派生して「署名押印すること」の意を得た。ここで参照すべきは、「署名の純粹な出来事といったものはなく、純粹な署名もない。署名それ自体、あらゆる言説やエクリチュールの出来事と同様、疑わしいもの、模倣可能なもの、したがって、偽造＝歪曲可能なものである²⁰⁾」というデリダの指摘である。これを踏まえて言うならば、シドロランの「匿名の落書き」は、「署名された文学」の意味の起源にして所有者たる「作者」を抹消し、誰が書いたとも分からぬ匿名性の中に、つまり、「テキスト」という還元不可能な複数性の中に「作品」を開いていくことを意味しているのではなかろうか。この悪戯によって、「書かれたもの」^{エクリチュール}の意味の起源はいま一度疑わしいものと

なる。「いま一度」と言うのは、先に検討したオージュの「搔き文字」^{グラフィティ}は、まさに、「プレアダミット」という「作者」^{オトツール}を偽造するものであったからである。彼の振る舞いにより、ラスコーの洞窟に残された「書かれたもの」^{エクリチュール}は文明の曙の証拠たることをやめ、歴史の教科書の第一章、第一節は、シドロランの「落書き」^{グラフィティ}同様、極めて疑わしいものとなる。かくして、オージュ＝シドロラン＝クノーの「搔き文字＝落書き＝文学」に、我々は「あるテキストにある《作者》をあてがうことは、そのテキストに歯止めをかけることであり、ある記号内容を与えることであり、エクリチュールを閉ざすことである²¹⁾」と主張するテキスト論にも通ずる先駆性を見出すことができよう。

他方、署名の偽造は、著作権を絶対的なものとする「正義」にとっては、許し難いスキャンダルであろうし、とりわけラ・バランスにとっては、落書きの匿名性は我慢ならぬ不正であろう。もし「名前」に何の価値もないということになれば、自らの名の象徴的価値^{サンボリック}に捧げられたラ・バランスの生涯は無に帰してしまいかねない。それ故、是非とも彼は「匿名の落書き」の「作者」^{ノン・プロプル}を突き止めねばならず、ついに「シドロラン」という固有名詞を得る。つまり、「テキスト」の無限の多様性が一つの「作品」に封印されたのである。最終的な「建物」の崩壊の意味するところは、もはや言うまでもないであろう。

おわりに

以上、一つの小さな「引用」(ソシュールの線条性^{リネエール})から出発して、『青い花』のうちにクノーが書いた「一般言語学」を読み取ることが本論は、その中心的なフィギュールである「建物＝バベルの塔」の崩壊に、ロゴサントリズムの諸相——サンボリックな抑圧的秩序、絶対的な言葉の探究、「現在の書き言葉の際限のない圧政」——に対する全面的否定を確認し、最終的に、シドロラン＝オージュの「落書き＝搔き文字」^{グラフィティ}とともに、「作者の死」という「今日のエクリチュールの倫理的原則、おそらくもっとも根本的な倫理的原則²²⁾」にまで到達した。が、とするならば、『青い花』に記された署名

「レーモン・クノー」は、それ自体一つの逆説に他ならないであろう。すなわち、作者を生きることによって死にゆく作者、あるいは、作者を殺すことによって生きる作者という逆説である。これはいかなることなのだろうか。

「遠くへ！ 遠くへ！ ここでは泥が我々の^{ブルー}涙で出来ている」と、ボードレールの『悪の華』は歌った（《Moesta et errabunda》）。オーギュスタは愛馬デモステータに「遠くへ！ 遠くへ！ ここでは泥が我々の^{ブルー}花で出来ている」と嘆ずる。人語を解するペルシュロン馬が、すかさず「青いやつですね」と付け加える（*F.B.*, p.15）。もちろん主人の「青い花＝センチメンタル」を思いやってのことである。ここに明らかのように、レーモン・クノーの『青い花』は、その表題自体が一つの戯れなのであり、何らかの象徴的な意味を指し示しているというよりは、むしろ純然たるパロディーの記号なのである。が、本論においては、単なる滑^{ビュールレスク}稽な趣味が問題なのではなかった。そうではなく、「エクリチュールは互いに対話をおこない、他をパロディー化し、異義をとえあう²³⁾」という意味でのパロディー、クリステヴァならば「相互テクスト性」と呼ぶであろう「ある（ないしいくつかの）記号体系からもう一つの記号体系への転移²⁴⁾」が問題なのであった。クノーは記号連鎖の反復に微細な差異（pleurs/fleurs）を滑り込ませ、^{オリジナル}原本をもうひとつ別の記号体系（書きつつある『青い花』）に交差させ、新しい分節・接合を施す。とはいっても、まず^{オリジナル}原本があつて、しかる後にパロディーがあると考えれば、それは決定的に誤りであろう。いったん『青い花』が「作者」クノーの手を離れたからには、^{オリジナル}原本は「書かれたもの」に^エ残された^ク痕跡から^リ遡行してのみ見出されるべきものであり、両者の関係は逆転し、一見派生的に見える差異性の方が起源の同一性に先行することになる。クロード・シモネは「誰かがそこにいて暴きたてるからこそ、偽装は滑稽なのである。それ故、読者の役割は決定的である²⁵⁾」と述べているが、そもそもテキストの網の目から相互テクスト的な差異を掬い取ることなしには、^{オリジナル}原本もパロディーも存在し得ない。この点で、文字通りの「引用の織物²⁶⁾」として編まれている『青い花』は、単にパロディーの横溢を戯れているというよりも、そのようなパロディーの

逆説自体をパロディー化することによって、自己の意味作用の危うさを明確に指し示しているように思われる。

彼ら〔＝放浪民〕が遠ざかっていくのを見ながら、シドロランは「彼は移住し始めた」と言った。「秋が近づく。我が永遠なる秋よ。ああ、我が心の季節よ。」

「何ですか？」と通りかかった男が尋ねた。

「私は引用していたのですよ」とシドロラン。

「誰のですか？」

「ある詩人のですよ、もちろん。この12音節詩を聞いたことはないのですか？」(F.B., p.165)

シドロランが口ずさんでいる「引用」は、アポリネールの『アルコール』に収められている《signe》の一節であるが、ここに明らかなおおりに、引用されたものは、必ずしも引用する言葉に現前するとは限らない。というよりも、「引用された」という出来事自体、実は成立していないのであり、それ故、そもそもここにはパロディーは存在しないのである。ここでシドロランの「意図」を盾にパロディーの成立を主張しても無駄である。というのも、パロディーに限らず、意味伝達の過程の一切は、ウィトゲンシュタインの言語ゲームが明らかにしたように、徹底的に予見不可能なものであり、語る主体の「意図」はその根拠とはなり得ないからである²⁷⁾。それ故、アポリネールを「引用」したシドロランの発話には、逆説的にも、「アポリネール」という固有名詞は存在せず、パロディーの意味作用は、人知れず匿名性の中に葬り去られることになる。パロディーがあるということ自体、なんら明示的なものではないのである。が、問題はそれだけではない。次は別の放浪民が通りかかった時の会話である。

「本当にそうだ。彼らは移住し始めた。秋が近づく。」

(……)

「その続きは？」と通行人が訊ねる。

「続きって、いったい何の？」

「引用の続きですよ。」

「そう急かさないうで。引用はまだ始まってもいませんよ。」

「それじゃあ、[今の]《彼らは移住し始めた。秋が近い》は[引用ではなくて]あなたの手によるものなのですか？」

「まったく私の手によるものですよ。」(F.B., p.166)

ここでは前とは逆に、シドロランは、外的状況を客観的に述べているに過ぎないのだが、通行人はそこにアポリネールの「引用」を見出してしまったのである。上と同じ論法で言えば、今度は「シドロラン」という固有名詞が剝奪され、空白となった発話源に「アポリネール」といういわば偽造された「作家」が挿入されることによって、パロディーが成立したと言えよう。ここでもう一度強調したいが、引用する意図がパロディーの根拠とならないとするならば、我々はこれを転倒させ、引用する意図の不在、あるいは、引用しない意図もまたパロディーの不在の根拠とはならないとすることができる。ということは、通行人は「まったく私の手によるものだ」と明言するシドロランに、「いや、あなたはアポリネールを引用していたのだ」と言い張ることも可能であるし、まったく正当でさえあるのである。シドロランの意図とは無関係に、事実、パロディーは成立したのであって、この出来事を否定することは、原理的に不可能である。

このように、パロディーというものは、徹頭徹尾、無根拠的な出来事なのであり、そこにおいては、どちらがオリジナルでどちらがパロディーであるか、といった問いは意味をなさない。それらは共にオリジナルであると同時にパロディーであり、それでいて、そのどちらでもない。ここに到って『青い花』におけるパロディーの意味も自ずと明らかになるろう。それは「レーモン・クノー」という署名の固有名詞性を自ら抹消することに他ならない。こ

うして『青い花』は、その中心の非在を贖うために、無数の他者を反復し、改竄し、剽窃し、偽造する。つまり、シドロランの^{グラフィティ}落書きのように署名の権威を損ない、オージュの^{グラフィティ}掻き文字のように「作者」を偽造するのである。いまや「レーモン・クノー」は還元不可能な複数性であり、無数の他者の名が書き込まれていると同時に、絶対的に匿名的である。『青い花』におけるパロディは、そのような固有名詞ならざる固有名詞を巡る極めて危うい出来事なのである。

註

*参照テキスト及び略号は以下の通りである。

F.B. : Raymond QUENEAU, *Les Fleurs bleues*, Gallimard, 《FOLIO》, 1965.

H.M. : Raymond QUENEAU, *Une Histoire modèle*, Gallimard, 《NRF》, 1966.

B.C.L. : Raymond QUENEAU, *Bâtons, Chiffres et Lettres*, Gallimard, 《IDEES》, 1965.

Entretiens : Raymond QUENEAU, *Entretiens avec Georges Charbonnier*, Gallimard, 《NRF》, 1962.

V.G. : Raymond QUENEAU, *Le Voyage en Grèce*, Gallimard, 《NRF》, 1973.

C.L.G. : Ferdinand de SAUSSURE, *Cours de Linguistique générale*, PAYOT, 1972.

1) ヴァンサン・デコンブ, 『知の最前線』, 高橋允昭訳, TBS ブリタニカ, 1983, p.19. なお高等研究学院におけるコジェーヴの講義は、後にクノーの計らいにより刊行されることになる。Voir André KOJÈVE, *Introduction à la lecture de Hegel*, Gallimard, 1947.

2) Anne CLANCIER, 《Le Manuel du Parfait Analysé》 in *Raymond Queneau*, Duponchelle, 《L'ARC》, 1990, p.34.

3) Yvon BELAVAL, 《Les Deux Langages》 in *ibid.*, pp.14-22. が指摘してい

るように、クノーのエクリチュールには、数学的・幾何学的な厳密な形式を求める動きと、我々が検討する「ネオ・バベル語」的な混乱への指向との対立が認められる。前者については、M.-N. CAMPANA-ROCHEFORT, 《Les Nombres des Fleurs bleues》 in *Queneau aujourd'hui*, Clancier-Guénaud, 1985, pp.159-177. を、また、後者については、Charles CAMPOUX, 《Du Bleu》 in *Raymond Queneau*, pp.23-28. をも参照。

- 4) ヴァンドリーをも含めて、この点については、《Préliminaires》の項目のもとに *B.C.L.* に収められた諸文（特に《*Ecrit en 1937*》および《*Ecrit en 1955*》）、および、*Entretiens* を参照。
- 5) ロラン・バルト、『零度のエクリチュール』、渡辺淳、沢村昂一訳、みすず書房、1971、p.78.
- 6) 「創世記」第11章9節には、バベル（「混乱」）とバレル（bal-el「彼は乱した」）との語呂合わせが見られるという。Cf. マリナ・ヤグェーロ、『言語の夢想者』、谷川佳子、江口修訳、工作舎、1990、p.38.
- 7) *Ibid.*, pp.42-43.
- 8) 「言葉づかひの誤り、リエゾンの誤り、不正確な発音、不的確な表現、間違つた構文、勘違い、言い損ないなどでさえ、私は機会があればどんどん許可するだろう。不毛な誤りなどほとんどないのだ。」(*B.C.L.*, p.69)
- 9) セルジュ・ユタン、『錬金術』、有田忠郎訳、白水社、《文庫クセジュ》、1972、p.17. に引用されたA・サヴォレの定義による。
- 10) *V.G.*, p.90. に、この手紙への言及が見られる。
- 11) ミシェル・フーコー、『言葉と物』、渡辺一民、佐々木明訳、新潮社、1974、p.23.
- 12) Cf. クロード・レヴィ＝ストロース、『野性の思考』、大橋保夫訳、みすず書房、1976.
- 13) フーコー、*op. cit.*, p.23.
- 14) Cf. ジュリア・クリステヴァ、『詩的言語の革命』、原田邦夫訳、勁草書房、1991.

- 15) Cf. ジークムント・フロイト, 『夢判断 (フロイト著作集 2)』, 高橋義孝訳, 人文書院, 1968.
- 16) もっとも, シドロランは, なるほど周縁的であるとはいえ, やはり共時体系に絡め取られているが故に, しばしば夢の内容を忘れてしまう (cf. *F.B.*, pp.160, 227, 232)。
- 17) *Op. cit.*, p.14. (強調はクリステヴァ)
- 18) *Ibid.*, p.54.
- 19) バルト, 『零度のエクリチュール』, p.5.
- 20) ジャック・デリダ, ポール・リクール, ルネ・シェレル他, 「哲学とコミュニケーション」, 広瀬浩司訳, 『現代思想』臨時増刊総特集デリダ, 16 巻 6 号, 青土社, 1988, pp.52-53.
- 21) バルト, 「作者の死」, 『物語の構造分析』, 花輪光訳, みすず書房, 1979, p.87.
- 22) ミシェル・フーコー, 『作者とは何か?』, 清水徹, 豊崎光一訳, 哲学書房, 1990, p.11.
- 23) バルト, 「作者の死」, p.88.
- 24) *Op. cit.*, p.56.
- 25) Claude SIMONNET, *Queneau déchiffré*, Julliard, 1962, p.14.
- 26) この点に関しては, Jean-Yves POUILLOUX, *Les Fleurs bleues de Raymond Queneau*, Gallimard, 《FOLIOTHEQUE》, pp.94-108. を参照。
- 27) Cf. ルードウィッヒ・ウイトゲンシュタイン, 『哲学探究(ウイトゲンシュタイン全集 8)』, 藤本隆志訳, 大修館書店, 1976.